

「生き残った」人たちの物語

稲葉敏郎(医学博士)

舞台『ねじまき鳥クロニクル』の初演を2020年2月26日に見た。未知の疫病が地球規模で流行しはじめ、社会に見えない壁が生まれていた時期だ。実際、翌日の27日には千鶴楽となってしまった。壁は唐突に落ちて来るのだ。

私は村上春樹の作品を穴が空くほど読み込んでいる。赤青鉛筆で本に線を引きながら読み(本を買った者の特権だ)、自分の日常に物語世界を編み込むようにして日々を送る。個人の夢よりも深くイメージ世界に飛び込むために、作者と読者は本を介して強い信頼関係を結ぶ。物語の森へ入り込むことは、医療職に従事している自分には、目の前の他者と物語を介して理解し合うためのいいレッスンにもなっている。

『ねじまき鳥クロニクル』を何度も読み直している私も、舞台初演を見た時、その圧倒的な素晴らしさに思わず立ち上がり拍手をした。春樹作品と同じ深さま

で、無意識の深海の底をタッチしない限り、春樹作品の演劇化は難しいはずだ。インバル・ピント/アミール・クリガーは、身体言語を常に新しい視点と解釈で翻訳し続けてきた表現者だ。外的な現実世界と内的なイメージ世界の秘密とをフィジカルな言語でつなぎあわせ、観客の身体や魂に直接的に訴えかけてくる。それは小説のあらすじを紹介しているのではない。異なる世界をメタファーで結びつける表現者の親和性が、舞台を創造的なものにしていく。ダンスは身体言語であり、脳を介さないダイレクトなコミュニケーション言語だ。オノマトペのように言語で概念化しにくい流動的な性質のものだ。この舞台ではメタファーとしてダンスが活躍し、頭ではなく肉体で物語を通過させるように迫ってくる。これこそが舞台の魅力だ。インバル・ピントは美術・衣裳においても常に自身に関わることで総合的に作品を深化させるため、その美意識も

魅力の一つだ。また、驚き喜ぶべきことに舞台の音楽は生演奏だ。ライブ演奏は空間そのものを物理的な振動で満たし、心と肉体も包み込む。音楽は舞台のダンスと共に揺らぐように変化し、そうした一回性の体験を舞台で共に過ごす。私は、春樹作品を読む時は小説に出てくる音楽のレコードを探し出し、物理的な振動で部屋を満たしながら物語へ足を踏み入れる。音楽のリズムとビートが、物語の時間軸となり読み手を導いてくれるからだ。初演を体感し、こんな贅沢な舞台はあったらと思う。音楽、ダンス、演技。互いが引き合う緊張関係が、舞台に力を付与していた。ただ、そんな素晴らしい2020年の舞台は突然に幕が下りてしまったのだ。そしていま、再び幕が上がる。

小説を何度も読んでいたが、舞台の体験で改めて感じたことがある。『ねじまき鳥クロニクル』に出てくる登場人物は、全員がなんとか「生き残った」人たちだ。生と死の紙一重の世界に行き、そこから生の世界へとギリギリ舞い戻ってきた人たちが登場する。まるで生の世界に舞い戻ることができなかつた人たちを代表しているかのように。だからこそ、全員が死の影を強く帯びている。そうして、生死の境界(マージナル)からは重要なメッセージが届けられる。あなたはどれだけ、そのコトバを受け取っただろうか。生き残ったにも関わらず、生の代償に大きく損なわれてしまった人もいる。歪みや変形はもう復元できないほど致命的なものだ。ただ、それでも何かを伝えようとして、懸命に生き延びているのだ。

舞台を見て感じたことがある。大きく損なわれた人と出会った時、僕らがすこしの勇気を出して助けたとすれば、その行為がまた他の誰かにもつながり、予期せぬ連鎖を起しているのではないだろうか。つまり、誰かを助けたことで、その人のおかげで助かった人が生まれ、またその人のおかげで助かった人が生まれていく。そうした連鎖は見えざるとも世界中で起きているのではないか。水の波紋がわずかでも伝わるように。愛する人がいて、愛する人をたった一人であっても助けることは、ささやかな善意が別の何かにつながる第一歩だ。もちろん、それは逆の局面でも同じことが起きている。誰かを傷つけ損なうことも、悪意の連鎖



のスイッチを押すことでもある。ここではない遠くの誰かに、波紋は静かに、そして確実に及んでいることがあるだろう。舞台初演を見た時、そうしたことを肉体が疼くように感じた。読書では得られない体験の通路があることに驚いたのだった。

演技が素晴らしく、ダンスが素晴らしく、音楽が素晴らしく、演出や舞台が素晴らしい。舞台上の出演者全員に光が当たっていたのは、演出家の視野の広さと愛ゆえだろう。

私が『ねじまき鳥クロニクル』から受け取った重要なメッセージがある。

*

「流れに逆らうことなく、上に行くべきは上に行き、下に行くべきは下に行く上に行くべきときには、いちばん高い塔をみつめてそのてっぺんに登ればよろしい。下に行くべきときには、いちばん深い井戸をみつめてその底に下りればよろしい。流れがないときには、じっとしておればよろしい。流れにさからえればすべては涸れる。すべてが涸れればこの世は闇だ。」(第1部 泥棒かささぎ編)

*

誰ともつながれない孤独な個の時間は誰にでもある。その時には、自分の底を掘り、井戸を掘るしかない。力の限り底を掘り続けると、井戸の底で「壁抜け」

が起こるかもしれない。そうした奇跡が起きたのかどうかは、当事者にさえわからない。自分がいまここに立つ地層の厚みを存在の強みへと変換していくために井戸を掘るのだ。読み手の孤独な行為こそが、作者の深い創造行為とのリンクになる。

私たちだけではなく、あらゆる表現者も見えない壁を感じた時期があった。ただ、優れた表現者は、社会の境界が変わることで流動的に変化する。制限により創造の種が蒔かれ、新しい表現が開花していく。制限は成長を促し、新しい可能性は作られ続ける。

インバル・ピントのルーツであるイスラエルが混迷の時期を迎えている今、偶然にも日本で再演が行われる意味は何なのだろうか。井戸の底はつながっているのだろうか。劇場と言う安全な場の中で、役者と音楽家と演出家と、作品を裏で支えるすべての人たちの見えざる守りの中で、個々が深い井戸へと潜る。その場所であらゆる声を通してせながら、私たちが新しい可能性を創る。そうしたことが可能なのは、舞台を見ているものも創っているものも、共に「生き残った」人たちだからだ。



by Kohei Yamamoto

稲葉俊郎(医学博士)

Toshiro Inaba

1979年熊本生まれ。医師、医学博士、東京大学医学部附属病院循環器内科助教(2014-20年)を経て、20年4月より軽井沢病院 総合診療科医長、信州大学社会基盤研究所特任准教授、東京大学先端科学技術研究センター客員研究員、東北芸術工科大学客員教授を兼任(山形ピエンナーレ2020・2022芸術監督)。22年4月より軽井沢病院長。在宅医療、山岳医療にも従事。未来の医療と社会の創発のため、あらゆる分野との接点を探る対話を積極的に行っている。単著『いのちを呼びさますもの』(17年/アノニマ・スタジオ)、『いのちはこのちへ』(20年/アノニマ・スタジオ)、『ころころするからだ』(18年/春秋社)、『からだところどころの健康学』(19年/NHK出版)、『いのちの居場所』(22年/扶桑社)、『ことばのくすり』(23年/大和書房)など。

HP:<https://www.toshiroinaba.com/>